

15. 爆竹

エリスの『人生のダンス』（Havelock Ellis ; The Dance of Life, 1923）ⁱを読むと、第一章の中に次のような話がある。

“中国人の性格およびその文明の遊戯的性質は、中国をただ遠望しようが接近しようがにかかわらず、誰でも知っている。いままで、中国人が火薬を発明したのはヨーロッパ人よりはるか前である、だが花火の他には別に用途がなかったと言う人がいる。これは西方から見ると大きな誤りのようで、火薬の貴重な用途を埋没させている。最近になってようやくあるヨーロッパ人があえて指摘した、‘火薬の正当な用途は明らかに花火爆竹を作り、とても美しいものを作り出したことにあるのであって、決して人を殺すことにはない’と。要するに、中国人は確かに、火薬のこの正当な用途を完全に理解することができた。われわれは、‘中国人の最も明らかな特性の一つは花火を喜ぶことである’と聞いている。その最も荘重な人民とこの最も明智あるもののが共に花火で遊ぶことに忙しい。もしベルグソンの著作が——中には花火の隠喩がとても多い——が中国語に翻訳されたなら、中国には多くの熱心なベルグソン派が生まれるだろうと、信じてよい。”ⁱⁱ

火薬の正当な用途は花火を作ることにある。花火を喜ぶのは良い癖であり、わたしもそう思う。ただ残念ながら中国人が喜ぶのは花火ではなくて爆竹である、——たといもう一步進んで、爆竹を喜ぶのもよいことだと言っても、不幸にして中国人は神を敬う（あるいは鬼を追っ払う）のを喜ぶだけで、決して爆竹そのものを喜ぶのではない。空中の糸のような花火、点々とした赤い光、あるいはバーンという音は、とても楽しいものだ。しかしながら中国人にとっては却って何でもない、彼は聞けども聞こえず見れども見えずでただそこで機械的に祭りの儀式を執り行うだけである。中国人の特性は麻痺であって、爆竹を鳴らすのがその特徴である。ただ子どもだけはまだとことん麻痺はしておらず、その行為もやや違う。彼らは花火をする、——まもなく大人について悪くなってしまうけれども、この時ばかりは真心からその“とても美しいもの”を鑑賞し、エリスが推奨する話に十分応えられる。こうした遊戯の分子こそ十分に保存され、生活を充実しかつ愉快にすべきであるが、福の神お迎えの用の“鳳凰の尾一万発”などは、——いい加減にしてくれだ！

花火の趣味は、中国人の中ではすでに失われたと言ってよい。ただ“熱心なベルグソン派”——および王学家は確かに少なくないから、この予言ではエリスは当たっていることになろう。甲子の年〔1924〕立春の日、一晩中の爆竹の音を聞いた後、北京に記す。

以上は旧作の雑感で、題名は『花火の趣味』、今取り出してみると、この二年のうちかなりの変化があったように思う。ベルグソン派と王学家はとっくにあまり聞かなくなったが、爆竹は相変わらずである。昨日“一晩中の爆竹の音を聞いて”、思わず二年前の感慨を引き起こした。中国人の生活には迷信、利己、麻痺が充満していることは、北京市民の徹夜で人を驚かせ鬼を追っ払う爆竹を鳴らすということに見て取れる。しかもその力はまたこのように大きく、軍警

当局でさえ禁止できない。わたしは又思わず一九二一年に書いた「中国人の悲哀」という詩の怨恨を感じた。

わたしが家で眠っている時、
彼は又壁の外のその中庭で、
二連発の爆竹を鳴らした。

※初出：1926年3月1日『語絲』第68期

ⁱ Havelock Ellis ; The Dance of Life, 1923, Houghton Mifflin Co. Introduction p.22~23.

ⁱⁱ このエリスの引用文の後に、初出誌掲載の文にある一部が削除されている。